

槐

かい
い

岡井省二創刊

平成16年11月号

平成十六年十一月一日発行 第十四卷第十一号 通巻第一六一号（毎月一回）日発行）
平成三年九月十八日第三種郵便物認可



須弥山

高橋将夫

まるめろと言へばこの色この形
八朔の人の匂ひと熊の皮
いつぱしの韋駄天鰻なりしかな
全山のもみぢの中の楓にて

魂の進化も紅葉黄葉かな

渦巻いているはもみぢの舞ひ上がる

三人の一人の笑ふ夕月夜

赤銅の流れとなりて鳥渡る

山頂の紅葉海辺の黄葉かな

須弥山の紅葉となりて燃ゆるなり

月明のダークマターでありしかな

乗 日

十川たかし

炎 昼 や 河 口 に 白 き タ ン ク 群
川 岸 の 草 い ち も ん じ せ せ り 蝶
味 噌 樽 の 黴 の し ら じ ら 人 消 ゆ る
盆 花 を 切 り た る 後 の 畑 か な
送 り 火 の 空 に ダ グ ラ ス ・ マ ッ カ ー サ ー
ク レ ゴ ー ル 匂 ふ て ゐ た る 山 残 暑
擦 り 傷 に メ ン ソ レ タ ー ム 秋 初 め
鬼 や ん ま 銀 や ん ま ほ か 名 の あ ま た
さ ざ 波 の 空 に あ ふ れ て つ く つ く し
や し や ぶ し の 実 に 秋 風 の と ど き け り

特別作品

山道の白萩風にふるひたつ
伸びきつて蔓の壁打つ秋日ざし
雨だれや朝の光に法師蟬
新涼や城の石垣弧の微か
日は海に松茸飯は焦げにけり
文月の月の出さうな五剣山
まだ高き野分の波に投網打つ
ずぶずぶの畳を捨てる厄日かな
足湯するここにも虫の遠音かな
鰯雲忘れし名前前浮かび来ず

槐安集

市場基巳

藁打ちし砧も古りぬ花柘榴
避暑の山蟹は十里を歩きけり
びつしりと花藪枯らし川曲る
刈りあとの草踏んで朝鳩とゐる
燕の引く日うながす風と知れ

水野恒彦

水晶の大塊に夏果むとす
魂ぬけの玉蟲ひとつ月下なり
刀豆の硯の脇に置かれあり
桐の木のをちに見えたる魂迎へ
天水に水のおふるる銀河かな



石脇みはる

八月の神田に水引いてをる
蟬殻の重なり合うてゐたりけり
コスモスや十三重の塔の影
錠剤を口にし月の暈の内
蛸や江口堂へとまぬらうか

竹内悦子

とりかぶと厨のうらはむらさきに
貧乏かづら揺れて男のふくらはぎ
白木槿夢の途中をうろろうす
結界のうちそとを舞ふあきつかな
月の夜の爪切る潮のながれかな

木下野生

近道は交番の裏魂迎へ
施餓鬼寺怒涛まぢかくしてあたり
駅前にはそば屋ありけり秋の暮
あたらしき畳を担ぎいわし雲
庭掃いて台風はまだ沖のはう

中島陽華

箸洗ひのうす味なりき夜の秋
まぼろしや倉の上なる夏の月
まつすぐに來たる鱸の洗ひかな
山笠に男揃たよ清し汁
蓮の実の飛ぶや出囃子鳴つてをり

延広禎一

夏霧を吸うて暁天坐禪かな
金神こんじんの間日まひびに丹頂鶴来る
桃の仁啞へハナヒゲウツボをる
墓守に白桃剥いてもらひけり
月白に手をかざしをるうつぼ鞆猿

栗栖恵通子

秋の蚊帳ふるうて黄泉に入りにつけり
鹿苑の闇の匂ふて八月尽
処暑の刃の顎の血合削ぎにける
むらさきの影があとさき秋遍路
竹輪麩のむかふ無月となりにつけり

加藤みき

新涼やコツクスのご糸たしかなり
参道の形に 星空 蚯蚓 鳴く
衣被縁起 絵巻を 拝見す
星月夜波に ころがる 石の音
新豆腐 烏集まる 店の裏

雨村敏子

鬼灯の紅天辺まで上ぼりける
垂麻畑をひと廻りして木の影に
お日さまのマークがずらり心太
月桃の花や星砂濡れてをる
ゆめ茫茫あぶくがばかり金魚玉

大島翠木

晩年や金魚は殊になつきたる
夜の秋魚に 串を 打つてをり
林中に 声ちらちらと 展墓かな
石棺のま空に 飛んで 秋茜
処暑の日や巫女の二人の出払ふて



槐市集

植木戴子

噴水のオブジェ人魚の動きかな
滝壺に皿濡らしたる河童かな
鷺舞の赤き蹴出しや日の盛
筆塚の見えるところや百合の寺
土の上に秋茄子置かる能の村

植松美根子

此岸から船の出てをり蝉しぐれ
引導をわたされてをり真桑瓜
黒光る階段筆筒ざくろの実
明け方に息ひきとりぬ花おくら
頂上に花のこしつつ胡麻みのる

宇田喜美栄

送り火は天への道と思ひけり
初南瓜煮てをり佛間風とほる
蓮咲くに暇ありけり小布施かな
地の底をぶち抜け来たる牛蛙
聞き役に徹してゐたり秋扇

大山里

牛神に誰か来てゐる花鶏頭
八月のひよんの実川は波立てる
盆の月揚げ船にある溜り水
つぶされて蛇のうろこの銀や
もも色の芥も混る雨の蓮



槐集

高橋将夫選

涼しさの空也の音声おんじょう阿弥陀仏
枚方

中野 京子

くろがねの蟻の触角胎蔵界
岡崎

本多 俊子

八面六臂空の花火をもち帰り
闇の中月下美人をさし出され
水甕を水あふれをり茗荷の子
窓外の雨風忘れ走馬燈

近藤 喜子

鷹の目の夢の仕舞に泛びけり

香川

黒田 咲子

未来図の眩しさ蕎麦の花盛り
つらつらと釈迦苦行像虫ほぼつき
秋水や頭上を真青なる気流
白帝の投げおろしたる夕日かな
百年の栃の木を誉め秋扇
枚方

谷村 幸子

越前水母ハンモックにて水夫ねむる
押へられたるかまきりの首根つ子
獅子唐の真つ赤云ひたきことあり
苦瓜のぶらさがりたる宇宙かな
枚方

谷口佳世子

方丈記糺の森の水澄めり
秋暑しジャズにのりたる木魚かな
雲中をぬけて札所や秋の風
おいでおいで裸のままの赤ん坊

炎天や少しつめたき耳の穴
八朔の糺の森に入りにけり
幻の世に心太食べてをる
いちぢくやひと足先に帰る人

銀河往来 高橋将夫

〓 思えば成る 〓

◇人の行為は脳の生理的な反応（神経細胞の興奮と刺激伝達物質の放出）で説明できるという。我々の行動はそのシステムの生理的反応の結果にすぎないというわけである。確かに、脳のどの部分がどういう機能をつかさどっているのか、脳造影法の進歩でかなり詳細に解明されている。この脳のシステムは、最初は遺伝子により構築され、その後は学習により発達していく。人はこうして構築された脳のシステムの生理的反応により行動しているというわけだが、そこには意思（関心）が大きく関与していると私は思っている。

ガスを消し忘れたのではないかと気になって、確認に行く時がある。大方はボケがきたかなと、笑い話で済まされる。ところが、そのような心配に繰返し襲われ、その度に確認に行かずにおれないという人がいる。脅迫性障害という。ガスは消えているとわかっていても、確認に行かずにおれないところが特徴である。そういう人については、脳のシステムの一部に異常があることが脳造影で確認されている。この人が自分の意志で確認行動以外のことに関心を移し、別の行動ができるようになったとき、脳のシステムは変化していたという。つまり、脳の生理的なシステムは意思により変えることができるというのである。関心の置き方で変わるといふ。俳句は精神の風景。「精神の位相」が大切というのも、実は心のあり方が脳の生理的活動を通じ、表に現れるからに他ならない。

◇「槐集」観照

八面六臂空の花火をもち帰り 中野 京子
大活躍の結果、持ち帰ったのが空つぼの花火の筒とは笑止千万。
単なるゴミの持ち帰りだとしても、こうなると一つの思想。

白帝の投げおろしたる夕日かな 近藤 喜子
秋の夕日は白帝が投げた玉ですか。ナポレオン皇帝の翻るマン
トが思い浮かぶ。

方丈記には思想がある。糺の森の水澄めり 谷村 幸子
方丈記には思想がある。糺の森には歴史がある。ゆく川の流れ
は絶えずして、しかももとの水にはあらず。知ってか知らずか、
秋の水はあくまでも澄んでいる。

星ひとつ消え 蠟螂の生れけり 本多 俊子
はるか宇宙のかなたで起こったことは、直接こちらに及ばない
…局所性の原理である。しかし、宇宙には局所性で説明がつか
ぬこともある。星が消えて、蠟螂が生まれた。

獅子唐の真つ赤言ひたきことのあり 黒田 咲子
言いたいことは私にもいろいろある。しかし、真つ赤な獅子唐
を見て言いたくなるようなことはない…かもしれない。

苦瓜のぶらさがりたる宇宙かな 谷口佳世子
苦瓜はメタファー。たしかに、宇宙は苦瓜のぶらさがりような
不思議な感覚を喚起する世界ではある。（以下略）